

宇治拾遺物誌

七

共八

今治拾遺物語下末一目錄

一 東人多ふ心事

一 河原院鞆の靈行

一 八歳童孔子の答事

一 ていよいい事

一 貧俗親佛性富事

一 宗初高村虎事

一 遣唐使子虎の食料事

一 或上達中おの町る人あふ事

一 湯成流るけ地入事  
一 水無流波じさく事

一 一條棧布を巻の事  
一 よそのや得金事

一 乞捕翁馬事  
一 懐意中とり邪事

一 蕪を買てくる事  
一 養賢人事

一 大升を妹強力事



- うろ唐八女の華も生るるあつすてふらさる
- 出雲とみ南父慈よなりとつとをちりう〜殺食の
- 念伸僧廣注さる
- 一慈是大帥入額額城あり
- 波を傍究るりつる
- 一藤昭上人光鉾事
- 清徳川さる
- 一優婆塞多才子の
- 海を以て舟舟さる
- 一寛和僧のゆるりまの
- 陸に蛇もあふる
- 一魚類事

一八段のつもの...  
 一たの...  
 一たの...  
 一たの...  
 一たの...

宇治拾遺物語下末

今そ若あつあつとのまらみ〜うとれみよ〜りり  
 か雲をこて

あみて〜や虫れちも鹿〜一火のほきてこ人ま  
 とこみ〜い〜つあつた人れやうよま〜んとて  
 ま〜しや其之のうとたるり〜り〜とそ

命を〜り〜河原院へ鞆れなるた食のあるりみられ  
 くのちが〜つたの〜〜他〜〜〜〜と〜と〜と  
 てちが〜とや〜せ〜し〜あ〜く〜の〜〜よ〜し〜ん〜け〜く  
 して住ぬ〜り〜お〜〜〜勢てのり〜ち〜交〜院〜ま〜り  
 る〜ら〜や〜宮〜の〜西〜門〜〜ひ〜り〜事〜さ〜り〜ま〜ん〜院〜す〜ん

せ流らるやり小敷中りりよ高射ハ塗こもをりて  
ろより死て入つあつやうよあがされされんせ  
の六ひハ装束うつもくちころ人のたひもき勢  
取て二あるりのまぐつこつりてあらしあれの  
まうも心せのひまのまよ終翁やと融ハたあの  
ういもをぬかあうよらとちとささるしうと流ら  
流連ハ家なれも住しよあますのあしひなく  
あまぐひやうはへつとととせしうまをい  
やあ吳やうの事ありあなこの子孫ハ我もとらき  
あまを住しよとあまうらき取てのこつハう  
あつあれもあますいとおのくやううひうそとあ

もつふ流ら連たれらうらうらようあわこの  
ありらんハ流連つこいあまよあつこなるり  
この人きまおとよあひてまうらよまうら  
あまのひてんやいそひひあ  
今や昔りああよ孔子道とわあよハつものなうま  
あひわ孔子に回ヤう日のつらあに洛陽こつ  
あうまよとこつらうらうあう目の入あをまし  
らうらうのちのうまヤヤ日の出入あハ見也  
らうらうまあしあまをれを日れおろあをらう  
らうらうまあしあまをれを日れおろあをらう  
らうらうまあしあまをれを日れおろあをらう  
らうらうまあしあまをれを日れおろあをらう

とひつくる人もなれおつくとひひりつとひつくる  
もあつるぬかりたりとそ人いひひり  
今を若親よけうもろ若ありたり物々はあま  
て親とやしきよ孝養の心せよ志しれぬ権とるま  
亦にまてむつひの賜は初に物やまぬれ同悦てお  
の賜は初に物やまぬれ又亦よまてあまてつりま  
わられしおの賜あまて家よ次つものくのこと  
くすり親よ年一はよかりておほやまをい  
ておほようてういほりけうれ名をてい  
伊とそひひり  
今も若りあつるのつとひひりお一人男あり家貧

ちくしてたつとる一妻子と養およかる一のしむ  
まともうと事ありて歳月をよ思ひひてあ  
傷よあひて養とく人ま事をとよ若恵あり僧よ  
こころやうぬらうとせんと思ひぬぬぬぬ  
よのひとあすしゆし家の中つおぬぬ  
よ死ぬよまぬれんしとらふ人寒の心とやう  
とくし僧のまぬれぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
よあすす仏法を信すくやとつおお又とひてあ  
ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
て二かく信とる一まのまかぬぬぬぬぬぬぬ  
一からくし僧のらむく我むやこれ佛や我むと

なれてハ佛を―と然を我びれおも仏のつたすお  
もといふとすりてかしくたあててる建よりけ  
いといひよつきてよりひく思はれん梵釋法をまゝこ  
てまのこゝろをたれんけりうらうらうは宝出まゝしおれ肉の  
つらおかりぬ命をもちよりのく心佛を念入て  
淨土にすまやうもありてなりこれしん羅羅みる  
人といふところをれこけりといふん

今を若壹波守宗初うあおとけりうを死しなうもて  
まの殺さんや―ひ連ち小舟もきて逃て新羅國を  
渡りてくれどぬたるらる程は新羅のまをい  
こりあゝのりみ―うのくちりこもくはひうとく

をも虎乃こころはりりて人殺くぬるりこりふは  
男も小虎やいくつらちうもむらゝ一はう、像  
よひきて人をくひてはきてらましくすもや  
とつたをまゝてあめ男のまやうらの虎もあひて  
一夫と射し―かともや虎―こくはをよ―そ志れ  
せもあつひま―うやつごのくうを連んは國の人  
こ兵乃道もろまふ―そをあめれとひひけりうをん  
まゝて固守よつらくのもを死しうは日中人―  
まやつひひ連ち―て死しとせう人としるはし人  
まゝてう―ちりといふしあめあまゝとあめあめと  
らめの人くもとやまゝく射しとやまゝなりとあめあめけ



















めてみりしをむハ羽としとくして馬の双なる巻  
るりなるむろろとさよーやみをとめて奥の方へ  
ゆりた建こ山黒梅子をーめて教をさーい進んでよ  
里西遊しつおおくとつたれハ太刀成ぬきて  
いらしきらんとくろくく女をさうさくはとまつくハ  
地りくおくくくゆらんせよとつひていよとる  
百鬼衆のそとあひやうんとおろししつるりり  
うれより一條のきびーきやゆと又ととまら登さる  
けつとさし  
命を著書お佐かろ人ありたる冠つちきをのさる  
あつりまの世の人ありきと入ゆーとるんはきこり

ろくあつ八條と系極との島の中よちやーの小  
おつつありそのお成初程に夕まがーなれハばお  
馬ふりゆりてつるぬみまて女ひとをあり馬を  
月い進て夕なうとまをこまてひうなる小卒袴の  
やうるるんれあさる鹿をうらりあてぬいあむる  
とりうてひりーとまをさくくりよぬくまぬた進を  
うしきくぐがとこころとみまを金とよむり  
ぬ希まのーとりまとむもひてまげんうとこころよ  
まをやりくしてまよとよやうひるやさそのる  
う女のまやうはれるようゆしむうーよるまう  
てゆらるり著長老の家むしゆりりりばおと念せ

の池までゆるりと減らみまゐる大なるるすくの  
りーとどちりささうのちりのもささきのくりりさ  
を倉のあとも島よつとささうのほろるるよまの  
下より掘出されどゆるやうもあうくをれうらに約  
まらつきりきんとどゆるとかやちり屋よりか  
まらくつえやうもさゆるにひくむくめくしてと  
まてゆるるりとさげまやゆるはるとりてん後に  
目くをりあつちのもうりくくと思ひてかよりの  
やうゆるゆるりてんよといひゆるのよれあよ  
ゆるといひゆるをえんよいりいり人よむさ  
車とゆるよゆるてはいていりていりゆるゆる

まらとゆるいといよさうゆるゆるゆるゆる  
はこの女よとらさつらもあつちいりかまよああ  
いりかとさうそりいりいり思ひいりいりいり  
家よりのあつてゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる  
ささよよさささゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる  
らゆるなりいりいり思ひいりあつちいりあつち  
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる  
のゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる  
まらゆるもてあつちいりいりいりいりいりいり  
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる  
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる





町をいへばあきなれども一うのてはきいひのしるあが  
るうれなまのあしひの大絶をうひひるここと二まら  
るしそま一うなりるとうれりしゆりははひのあ  
のまのりしうりやのあるひの金のるをもち  
てうまを本たのやして遠にたりけりるり  
かちあまよとれえ捕くくのすけよるりてしもの衆  
の使しけりて一糸大踏まひりけり程よぬよん  
の車あがくかゝるをまそく物さひりりあまいり程よ  
むのらうよてまわしうと人みほもや思ひて馬と  
うしくあをりひ車や馬くうしむむらぬ羊一むひ  
いらものゝたをらうとあまそむらぬあまきあひい  
みとみうほとみうしうくたひあまきあまきあ  
かりもとくをあま一うほとあまのひま一うや  
うとてあれあひの馬うひのまひひとてうふ  
こととりてまはうとあま一うあまふうあてあ  
かひしうしあま一うあまあまあまあまありと  
てぬよんとあま車一のまう一うあまこらう目れ  
う一あまあまあま一うあま一うみくう一  
大踏りののいらと一うてあまくあうる眼を車  
う一まのとのこことあま一うあま一う車一の  
う一あまあまあま一うあま一うあまあまのむら  
ふらむらてあまあま一うあまあまあま一うあま

馬よーの世しあまーうのゆくとむをちる人た  
まも世の世はたつてまをささくしてまつゆのまり  
うしてむさしむちうものまあすこれ大路をい  
かううるたり馬ハくらをりまなまてしゆゆまん  
とあふいおちゆめまれすとひさつう引くらめりせ  
やぬをれしとも馬とちりーとちるるまのあま唐  
鞍そさうなるちゆみのくく入るもあうをうれ  
ましまをうくくつたつもやむらぬうれあうひ  
又冠のたつぬるまをわしとゆふものまあすうと  
をうくつき入るまとまうくうる物ありをまよ  
ひんハう勢まこれやひさううりーされまお

ちんる冠恨びつゝあけりまふあす何のあ  
とくへ大掌舎の御襖にたつたにれ中納言さうれ  
何の初幸まおけくくれとくあもつんう色やう  
るうとまうあうあんあうもありあまあはこあ  
のわうまを建突のうまうあうもまうひあこくた  
こまうしとて車いふおをゆりほくうりう入  
てのひまうものくくもくひして冠りてこ  
とつめてあんとりてさう入りうをあよとよとて  
まひひれいあうこさうかこさう冠ささいをちて馬  
うひひれいあうこさうかこさう冠ささいをちて馬  
うひひれいあうこさうかこさう冠ささいをちて馬



ていゝくらゐさうらてううしとげんさあつてもお  
ひあきてなん西条の家。やうりまうりげんさ  
しものぶつさうしやうしとげんさ  
若天竺の人あううそのまんたあ小銭ふ十貫をみ  
あもたまうやうたひう川のりくをゆくもおに  
くらんありあのおく銭やまうあうりうあくひ  
とごうしとごうあり銭をらううとあうまでは  
龜をもけれまうそとくへもくあうて物うきん  
すうとあううれ龜のまんともあうしはあの人うし  
くうみうまあきひのうりてあうきんう  
なれもうしとあうしなりともきんううまうし  
ての包をうけうぶうううもとさうてこれ五十  
貫の銭をうあううひもくしめらひひし思ふ  
やう親のたうの買う隣の家へやうはく銭を  
うう包てやうぬれも親のうけうたらうまん  
うしきりとしてうごむやのりく包ううあう  
うううねハ親のりくをうらうるあうんけあて  
やう家に龜うりけうんきんありのわうりて  
あうらあうしと語をうて親の家うあうて  
てせよを龜うもつあううううううう親  
のううやううあうあううううううう  
うううあうううううううううううう

あつくりのめふりるてゆりては進もるれよしとや  
ふんしそりつふさるるとりぬをぶやのまや・思  
まこつて人むさしやうなるりふ人をれく十書  
ぼくのらてきなりつおあれさるうとて思をなれ  
あのかよもさたぬれなううりりわりしてさか  
しつぬうりれその口は川はむら入をこてとる  
りうておやれのおよ子のぬらぬさ兒はむらと  
るり

若備中一國は船目りりるころれつ子よひまのま  
き人とのふきなるまうりき男よきむりり時後とこ  
たりえれかつしきさきんとく後と死の女れりし

初て愛わらをして後物渡してぬこむ推よんてあは  
たしと一とやるり固守れゆ子のたさき入おとひ  
ろかりらるまほを十七八りの男よおけりたり  
らしくやあらすうこちをきよひりり人回五人計  
くしんとあれや後と死の女れもとくゆへとぬれ  
つゆあつひあまし一供こつひてくれとまきんも  
上の方れうらそへて赤やのりおよつらてりが  
ふりのそきとみましは悲りりかぬと後とあらく  
まのあかりつらううとてあつひとさうを女と  
てよおりみよは後るり必たをまてなりりりりり  
るまやむらりてんくぬれりてらちみりしとく













人きゆのひはしこみゆあつうくほそしや股だち  
かしとそしうらこちうけうれひりしれりく考ふれ  
しうととれくみくまきうつゆれひりしれりく  
しあやあぐひつしとこちうてつるやさいゆたぐは  
まくしとれもふれまらうんとまの心もくんと  
まうりあやしゆまてんこまとくまうくかりと  
けしうらりゆいこちれつちりみくまらひりゆ  
ま病まうりて死まふれやの中まことくしとゆす  
かりまたり

今や若き城つわらみりゆりも毒こらふあまて  
ふりゆゆふくまかりてゆきもつしめまこつうく

しゆ理するんまらしれちううあ苗ゆまとの  
花としよくとまらひりゆこれそふれはあ苗  
乃子まゆりうあひつまけく毒みのころは師う  
こゆけうまゆくまはふれくあれゆりうまう  
侍教大師のりううしと天宗たてしあとも  
ひゆけうまはあはれとまゆりてゆりう  
まう雄は穀山のゆつまこま乃中まゆゆま  
ううつまとあれまはあのりまよまゆりて  
たゆまゆゆらううしゆゆまこまゆりたれ  
やうれまゆまてまゆまゆゆりまゆまゆま  
かれゆまれしゆまゆまゆまゆりまゆまゆま

さういふれよよしくのあそびみくらやち我ちのあ  
るのたうのううう老て扱ひさしてうくさそまやう  
あさて未阿も大風吹て、けてうた張れしとん  
しうおよ我にけてうのかもうれ下に三尺位の鏡  
まてうしゆあなく氷もよくうけせしまうきま  
しうまてあまううううう目とらんみうてううう  
まてあがきて遊よとひうりのうをアお殺志てん  
とをもあぬりおよせしとんを赤よ打てすしとて  
雪崩川よとちちうとあうしひろおめをみえた水  
すし初て扱ひうくかんちううとゆあ後さあて  
うう後としうううううううううううううう

つひて自善ぬうの目おかちて午のときれ未より  
縁よぞう死くもつて本をやり家を被風ううまぬ  
んううしてう家をけくろひゆものとき風りよく  
吹増よて村屋の家とともみお吹たをう聖山の竹本  
堂をまむ連ぬひち成よ未阿計うう吹てううれぬ  
もしうたれ株くのまてすらうううううううう板  
の中うううのうのう水た下うのううう大なる魚を  
むがうううまうりれ物ととも捕てまけて三れうき  
のまうううううううううううううううううう  
しうて遊よりひおがり夏のうううう上登りまうへり死  
ぬううううううううううううううううううう



とたのりり今も念佛のつとむがくつしものなほいと  
あすはひつし一れ何ぞのあすくきこまて違  
るしゆあしく念佛あきくへりすすこりうれ  
しきとまてつまひなくぬんじあは念佛中て水  
とりみ香とく死花をらうしてお菓子と念佛りり  
ときよPまきてあまじつひてのたりやしくひ  
めく極まきる物ありゆとすまりて念佛中てんま  
仏のあかより金まれ光を放てりしりまたる林の  
月几あまよりありあしくれおんりこしあましくの  
光をぬりし白毫の光まの力をとすすは対ひしを  
ありとありく海にありてたつこ入まくのともま

まぬし親言蓮室とくしちきてひりこののまよ  
しつしあまはあまのくたるひまのひりこまひよりて  
連臺よのりぬまてあつこくつさるあまあまの  
あまお子とまかしくたしとらとてひりこのあま  
ととつしひりつて七八日すれてあまあま下ま  
法師原念佛の僧よ湯まうしてあまをまうんとて  
あまのままお山よつるたりりらにまうりあまの  
ままあまひらうあまあまのあまのあまのあま  
あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあまあまあま









三玉たすのふくと母とまりて新精し給よ大なる  
りぬ一ひまといふと大神の神とくひて引やう  
ありとせほして列あはれおほい思ふもぬおのの  
あうらりしと出しはかきし出ぬまといふも共は  
かり今もいふやむりてうのむきこふし  
けいせきふりうのおゆをあして人まあり人のひ  
てあれをいひしよりやむすう人のひくもを  
治るとくひあれはくもへ初たりつかう述てあり  
あかりとの治よ表海まうるまひりうゆりかうれ  
額額城がりうしとへりぬ人并海しるしあが  
るまひ佛の助なうてま出へまやうりるしあられ  
考くたうしり人おとておつとてまぬうれ  
らりゆしと述のまて又都へ入るまのひてだれも  
よ會昌六年よ茂宗崩し治ぬ翌年大中元年茂宗  
位よつかのそ佛はがろやとことむもぬ建を思ひ  
のこもく佛はむしひのて十年とつめよ回本へ  
ゆきよ共言をひろのひたりとらん  
今も唐よまげり僧の天竺よりりて地事  
のすしとてのせりしゆ建や物かきし志ありさ  
かれもあつとせまたりあうしと出よ大なるあ  
あり半のまたりうはあおよ入ひるをいひてゆり  
まむげえし建を半れ初よつとて僧の入たりけり

りも捨ててありきはるりくぬみまことさそりぬ  
世界とがほめてみてみこさうぬれれ色りみかきうと  
死にふれらる半は死を食らりらみよこれ死を  
房らりてくひたりひれきうまきくと天しりしあ  
もつくあうんとおめてして目出るまりりあうそ  
あがましくひより田圃とも肥にあしめとこなり  
んことむうろくくちりけりあがれくちあ  
るこ那子けりめをぬきくや死こつおちあかの  
かこくありてせましくいほめてせうくちてあま  
のやまてせうくこれとそりてくちてくちの  
おこつちりりあうくんと死かふよこれたをひ

ふとらとけりなれをえくみまといぬく人あま  
助う人あまのりり人あまとい何こみしりや  
らしか子也日公まで死ぬぬはるも成てあがれ  
はよぬとこ一出ようやうよてあんきらるま耕三  
流天皇は波流よりりり日記よはり一記されたり  
今も昔三河入る赤眼といへん唐よまことてのり  
唐れ玉ぬんといか死重らも死し一あつものく雲を  
りさりて信勝とさうりく程と講し給けり  
の病まう今日几時をむかひの役あつへつ  
そのく我辨を死留せらして物えうくしこの病ま  
ひや日本僧と試んくこのかひはさて徳僧一産より

河内に鉾と死せて物としく三川入る末はつぎ  
たりき書。あつりて鉢をりりてあぐむとひんりの  
て鉾をやりてこそうけつとく人々せりやうあ  
たり森昭中けつやうちと死すの事やるの法を  
おろひてまうまきりありあつたよ森昭いまこた  
法を待たぬは自中固よをひてまは法はあ入り  
りまと末世もやあこあ入りりつてつ死さん  
やひひてぬこ野も世本の法鉢をうしくとごの  
死かつりあんの方よ逆て初念して去我國の三室  
あんたすけつと船こを海なき念入てのこ  
船よちちと海つふこものやうもくつり死て唐の僧  
乃鉾よりまこやく死て物とつけてぬぬうれ時ま  
らりもつめてんことな人ありとて拜りつとそ  
中待り

今も昔は河内かくそ業代唐をたつりてあこ  
ち小僧まひつ水りし時や水瓶を死してくまよ  
やうて春たりま強よはれかありれ初者ハあ  
とつて傍心おここたりあつるまひりつ船よ我ぬこ  
よう海らり水瓶来て水とくびつとあつたの又ひく  
まするやらしとこうまうくおぼしひ連きみの  
やさんと思ふ船よ傍の水瓶死来て水とくこて行  
そ河内瓶つきて初てみる小由よ五六十町よ

ついで着るに因りて又れり三つ申すあり持佛堂  
おののうへく造りのまゝとよのうへく考と一  
きよくす大井より遊る橋の本あり本下は道三  
やう池あり願作棚ハをこし飛つて多く座もれり  
みまにまはるけむしなるうこさひしりこし眼を  
窓ハの戸もとのそりしはくゑるは程多く巻さうた  
るなりあり不断香の燻みりたり能く連る歳七八  
十なりなる僧のきけあると五あそび死す眼息す  
と一のめりて眼のよりはまといみえとよくやま  
ららりて火兎界とりりてか持も岩窟縁しおこ  
りてあはれく至眼なりくお杖をこしまもあはれり

さうのうへて四方よりうへをうのこしは庵火のさ  
えで我まの火をつきてくやまよやくとりの聖  
大勢をばらりてまもふ町よよの聖の城をきて  
お杖を指て下のひりてのひりてくやま町火の  
こぬ上のひりてのひりてく何連うよこらう後をみる  
うへをこしくくくくこれとくは川のつらうを  
むきひくおまのひりての志りて後には程水瓶のまて  
水とくは後つおと死よりのなる人れむしんを  
うと思ひてみるうこしをくんとて案のりちやん  
みこてまららしとくお指しつれなりあやうい  
ひらよよりを山守子よさりてはゆるんとりよ







會果とつる者もいふにやうくして身子をた  
けりていふ佛道に入志ありけり  
今もまほしき法也とて約はる十餘歳計なり童子み  
ちよりのひねはれ重よ回て去何れ建りの重るやの  
はよ者答ふくみりてうろ物して候とけり  
去りれちを法華經をうそたりてや候へし童去は  
花壇と申すらも廻りうりたるをよふもまは  
りてと申すく又のありし我房よりして約  
は花壇をうりたることありし童はまはるくみ  
りてと申すの候はれは五臺山の坊は捨夫つきて  
は花壇をうりたる人候とて習ひて小僧常より來て

物候と申すれ人とていふひくはつてのよ來る  
小大徳とも童をとりたるわと童をうりてと申す  
れ去是うは山に位は文解よ候も物候し來は  
やとていふくみをいへるを童ハ又殊と云ふと  
あふす候ありされも何れ思ふも法也童の  
あはれめくはくをいへることたりれあはれを  
拂ておれくことたりまは童物へのけはとありけ  
り馬をいふあはれはりてくあはれをうりて  
うつくしきうきよあひぬはれ女の去り建あ馬  
のららひきていふみりのきくくありてむら  
あはれあはれとていひはれとていふをいへる



ちしうひでつちを法師のりしは格夫てあゆみの  
つまふりやせぬあをのこもくつ川あふより来る  
くろと白濁なれをくへ流つかやうやは建もつち  
法師等てたうと死ゆなりとて礼拝して去み登山  
ふや又殊のつまら恒流あるをなんら沙汰を海  
法世のせしらあふすりあひて文解とよくだつと  
重りひらまじうありひもしてしうとよる眼さ  
こころをせうひしてまたひさんへ細く目こらぬ  
まはく坊の庄あとの建たすく人の位しうり  
まはく一信くちあむとるうりひやまはるなり  
るトこれに佛道場多のま子の信のしとけ建とて

るよこくかまらうつまらるこれといとけあなれ  
いとしほくくてか人よらう流くもつらゆ人お  
又殊あ建をくあま物なれも教化して佛道よ入  
あめ流るりなれもよの人戒とまやうへくす  
今や若も眼寺僧に寛物とり人仁和さくことちり  
なれに仁和れやふれんうとくう佛理をさきとて  
書道とまあまう流るひて他たり目書てまんとあや  
うとまそののくくつくのらよまのあうまく  
りのほとくううとまむとまく流道中ゆひうり  
してしうちくたもまてしひらまあゆこまて  
づうあゆひくくまゆひらうのしにたらま

一  
里でかた夕暮もみられゆく程よくろを暮束し  
く男の志や引かれてかかへつおもひを  
して僧おれおそくお来てはいのちをとりま  
よぬきてしきくくくくくくくくくくくく  
こころ僧おれも何れも何れも何れも何れも  
きてまひへよゆりまじさのたぐひくゆら  
なしまつりたる所う一二むらうくくくく  
かりとくくくくくくくくくくくくくく  
かりのまじりもあつぬくふくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
ぬくくくくくくくくくくくくくくくく  
みくくくくくくくくくくくくくくく

ちくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
あくくくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくくくく  
のくくくくくくくくくくくくくく  
せくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
て七八人十人といくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくく

くはなすてちりやうとまふれしう勢ゆるり  
やまきくとのりてくれおたこやみよこのは  
まは神ありくもゆるくうかそて火と  
らありつゝあこゆとみうほとにうつくいの  
中よむらひたてそつらうぬ男のつゝこよ  
しう人もみこなれお遊のうつんと思入と  
くろは夢束したりとひてのあそていふ  
つうくいの中にむらたまきまりてみろく  
やうもひくてもんしうがほくもてわり  
すゝぬえたるけうあそまもた指ありうれ  
まのひくは神もふりていおも本馬もい

やまとてしうあきてあうていゝありたりく  
しと坊よぬて今よりぬ老は神とそああつり  
ていひんるれことなりとひてまこはらう  
乃中よ綿あつあけうとぬえてとくそくをひ  
ううてわりてなり

若澄おとひひりう相撲のおれおひうふあう河  
のまひうのあうき倒なるあちりけうはまられ川  
らしく本陰のりなれそつひのうらまて中  
ゆひてうたも兎てううあり杖とりあまのつぎ  
小書ひらやちんくうてとらくありさけうの涼  
まんとそそのあらののこつれ本陰より居る

有りありのそくぢうりうのてをもみしそり  
こもなきし物おひきけつりはりとまてけら  
つてそていけらけおたのきハおせんつら  
のえうらんこおおのまのみおまりてある  
ふ海よまにれおおのまううあうんと思ふ物よ  
これこのけらうまりて蛇のみをさうい  
おされそこれ蛇たさうしおとまおのがらん  
いまううやこみてまけらお蛇うら  
たきてはくくごまおこらるうらふよあうん  
と思ひてみきそ一スうおのてらうらうく  
てみけまそあうらうおのてらうくてめを引入て

有りありあるしのまうあう水みまうと  
かう程は又あるいん水はうらてのり蛇れを  
まけらううあきてううたうおまはうら  
せられこれ蛇あふのうらうとくまう  
てかきくまおれけうらきて澄けりう  
お有りまうひまうおましすうけうあうんと思  
てなうろはうまうひえやうくといひおれ  
川よひまう思んこすうらううらうらうら  
お有りまうりてあきけうらてんておれら  
うけうく引と思ふほとまうあうらうら  
あまおりつ引た強うれあうんこくあまお

をりてたてしむるはくひくはしをちりりありし  
やられぬくむらゆらとちりりよくぬき  
はれもゆきつりみふすけつしをぬき  
たてしむらよくひくありと思ふやとみ繩ひ  
まぬくやうそりまぬくまうそり血  
ちりりむらゆらぬきみしぬきぬきや  
ちりりひきぬきもくらきもひきぬき  
うれぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
まぬくぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
酒もぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
てあらひなすしすのちりり後者をよくひてたての

をりぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
ありぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
みしぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
まぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
ゆきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
ひきぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
力かのけいりくはらぬきぬきぬきぬき  
あしぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき  
て人十人のぬきぬきぬきぬきぬきぬき





こし哉子よとうりつりなれりあやまてりひ葵し  
見よこつひとそ母の腹うちて海子るのひもして  
けらりししつるつま嫁ありてつくもよひもては  
いさあつとつらふなむおぼしてつらふつらふ  
くそやしるふもんたりしれのみはらうよつあては  
うーとつ死やらなたりはれも母も命をけりるまきお  
よらりらひつくとまてらん希有のことかおと  
らららひらりきてふれ子おとかなふるあつあつお  
そつてつと書らり奥子しあすけりつれたりけ建を  
名をとも負書とそはきくらりりも七太吉の額ともハ  
是がうあつとつなりなりとハつらふも書きたつと

110X  
401  
S